

ウズベキスタン出身の留学生と 現役日本語教師が持つ文章観の検討

近藤 行人

要 約

本研究では、ウズベキスタン出身のロシア語を母語とする留学生1名と、日本人の日本語教師1名を対象に、異なる背景を持つ読み手の文章観が異なるのかを検討した。調査にあたり、日本語作文及びロシア語作文を翻訳した日本語作文計4編を読んでもらい、これに対する評価についてPAC分析を行った。分析の結果、よい作文だと判断する中核として、留学生が修辭的側面を重視したのに対し、日本語教師は、読みやすさやわかりやすさが最も重要であるとしていた。また、これらの文章観の形成には、文章に関する過去の経験が影響を及ぼしており、この経験の異なりが対照的な文章観につながっていることが示唆された。また、両者は、それぞれの文章観が対照的であることを知ることで、異なる文章観が存在することへの気づきを得ていた。

キーワード：文章観、PAC分析、インタビュー、教育背景、作文評価

1. はじめに

田中・坪根・初鹿野(1998)は、日本語教師と一般の読み手では作文評価に際し、着目する要素が異なり、共通した基準で測られていないことを指摘している。また、田中・長坂(2009)によれば、ライティングをよいとするには、各評価者の文章観が深く関わっており、評価者間の文章観の隔たりを埋めることは困難であったという。このように文章観は個人により異なっており、その形成には多様な背景が存在している可能性がある。

このような文章観の異なりは、評価者間だけでなく、評価者と書き手の間にもあり、その齟齬により、書かれた文章に対する誤解が生まれる可能性がある。学習者がよいと信じて書いてきた文章が、他の分野、或いは他の文化ではよい評価を受けることができない可能性があるのである。日本語教育の現場においては、多様な背景を有する学習者がともに学んでいる。したがって、学習者の文章観と日本語教師の文章観は異なっているのかを知り、異なっているのであれば、どのように、そしてなぜ異なっているのかについて自覚的である必要があるのではないだろうか。そこで、本研究では、文章観を狭義に「文章を読んだときにそれらをよいと判断するような文章に対する考え方」と定義する。そして、ある文章を読むときに影響を及ぼすような個人の文章観についてPAC分析を用いて顕在化し、ここで出てきた文章観がどのように解釈されるのかという行為を通じ、それぞれのライティングへの考え方やその形成について、学習者と日本語教師の事

例に即して導き出すことを試みる。

2. 文章観を形成するライティング教育

個々の文章観の形成には多様な要因が関わっている可能性がある。これを明らかにするには、個人に焦点を当て、それぞれの文章観を顕在化させようとして、どのような要因が影響を及ぼすのかを検討しなくてはならない。そのような考え方を基に、Li (1994) は、アメリカと中国で作文教育に携わる4人の教師を対象に、各々が選んだよい作文の相互評価を依頼した。両国の教師がお互いの作文を読むと、アメリカの教師がよいとした作文は、中国の教師にとってよい作文ではあるものの、情報不足であり、物足りない。一方で、中国の教師が選んだ作文はアメリカの教師にとって、冗長で明確さが不足している。このように、両国の教師ではよいと考える作文や、指導すべきだと考える点が大きく異なっていたのである。さらに、これらの傾向は米国と中国の教師に対する質問紙調査によっても裏付けられる結果となった。Liは、中国人留学生がアメリカで指導される際に感じる違和感の原因には、このような両国の文章観の異なりが影響しているのではないかと主張している。

渡邊 (2004) にも、作文教育は同一ではないことが述べられている。渡邊は、日米の初等教育における作文教育を調査した。その結果、米国では、型とジャンルを学び、因果関係を重視する作文教育が行われているのに対し、日本では、自由に生き生きと描くことを求め、文章に表れる心的過程を重視するという対照的な教育が観察されたとしている。日本と米国では、児童は異なる指針に基づく指導を受けている。こうした教育によって形成された思考表現スタイルの違いは、アメリカで勉強している日本人の学生がアメリカ人教師から低い評価を受けてしまう原因にさなっているという。

また、書き手が参加する共同体の価値観も、書かれる文章に影響を及ぼすという。Thondhlana (2000) は、ジンバブエにおいて異なる性格の学校に通う生徒の作文を比較した。これらの作文は、生徒自身が所属する共同体の価値観の違いにより、書かれる内容が異なっていたという。西洋文化の影響が強い学校に通う生徒は、キリスト教的な価値観を重視するためか、聖書への言及が多いのに対し、それ以外の学校の生徒は、自らの所属する村の伝統や慣習へ言及することが多かったのである。このように、生徒の所属する共同体が重視する倫理的、社会的価値観は、生徒が書こうとする文章に影響を及ぼすと考えられる。

上記の研究からは、作文には普遍的な「よい作文」があるわけではなく、個別の共同体における外的基準の影響を受けた「よい作文」があり、子どもはそれに準じた文章を書いていることが示唆される。個々の文章観の形成には、それぞれの共同体における経験が影響を及ぼしていると考えられる。そうであれば、学習者がこれまでに参加した共同体は教師とは異なっており、教師と学習者は異なる文章観を抱えている可能性があると考えられる。

3. 調査方法

調査にあたり、ロシア語の作文教科書の作文例¹⁾から、研究参加者とは別のロシア語母語話者がよいと感じた作文（ロA）、よくないと感じた作文（ロB）を各1編選び、日本語に翻訳した。また、Web上に公開されている日本の「青少年の主張」の入選作文から、最優秀作文（日A）と、これに比べ評価が低い入選作文（日B）を各1編選んだ²⁾。まず、研究参加者に、この4編の日本語作文をよいと思う順に順位付けしてもらい、その後、どの作文をよいと感じたかという点から、研究参加者の文章観を探るPAC分析を行った。PAC分析は、個人の態度構造を明らかにするために開発された分析手法であり、認知やイメージ構造の測定も可能である(内藤2002)。また、PAC分析は、深層面接の手法に基づいており、「よい作文」という顕在的でない基準を意識化するために、妥当なデータ採取方法である。

3.1. 研究参加者

研究参加者は、社会科学専攻のロシア語を母語とするウズベキスタン出身の留学生1名（以降、R）と、日本語教育専攻の大学院生で、現役の日本語教師1名（以降、J）である。

Rは、ウズベキスタン出身でロシア語を母語としている。年齢は20代半ばで、母国ではソビエトの影響が強い時代に、ロシア語による中等教育を受けてきた³⁾。日本語学習については、母国及び日本の大学で5年間の学習経験がある。また、上級の日本語能力を持つ社会科学系の大学院生で、日本語教育や言語学に関わった経験はない。

Jは4年の日本語教育経験を持ち、これまでに多様な背景を持つ学習者と向かい合ってきた。Jの大学時代の専攻は外国語で、現在は主に就労を目指す日本語学習者の支援に携わっている。Jは、自らの授業の範囲内で作文の指導や評価に携わったことはあるものの、作文を専門とする教師ではない。

3.2. データ採取手続き

データ採取は、PAC分析の手順に従う。まず、順位付けを行ってもらった作文に対し、「あなたは、これらの文章のうちどれを最もいい文章だと思いましたか。いい文章だとあなたが思った理由や、あなたにとってのいい文章についての基準など、なんでもいいので教えてください。よい作文ではないと判断するような、悪いと考える理由や基準でも構いません。できるだけたくさん挙げてみてください。」という刺激文を提示し、この刺激文から連想される語や表現を挙げ、重要度順へ並べ替えてもらった。そして、これらの連想語の類似度評定を研究参加者自身に行ってもらい⁴⁾、クラスター分析を行った⁵⁾。析出されたデンドログラム⁶⁾を基に、その意味や解釈を尋ねるインタビューを行った。また、PAC分析の結果をまとめたうえで、これを研究参加者にフィードバックし、自身及び相手の文章観に関する解釈について、フォローアップインタビューを行った。

4. 文章観に関するPAC分析の結果

4.1. ロシア語を母語とする留学生RのPAC分析の結果

4.1.1. 作文の順位

- ①愛と友情について（ロA） ②私の大切なもの（日A）
 ③年齢の壁を越えて（日B） ④父と子の世代間に生じる問題（ロB）

4.1.2. デンドログラム及びクラスターの解釈

本節では、析出されたデンドログラムから、研究参加者自身に命名してもらったそれぞれのクラスターについて、Rの解釈を報告する。

[評価のプラスアルファ]：作文にプラスアルファの評価を与えるものであると捉え、内容がおもしろいかどうかや、自分の意見だけでなく、引用や、日常言語のような単純な文ではない文学的に美しい表現があることにより、作文が良くなる。

[最低限必要な評価のベース]：作文として成り立つために必要な要素であると捉え、文章全体を通したつながりや文と文のつながり、接続を示すメタ表現等は、作文が一定のレベルを保つために、必要不可欠である。

[作文を印象付けるもの]：作文の印象を形成するものであると捉えている。タイトルと内容があていない場合や、論旨が明確でない場合には、期待が裏切られる。逆に統一性があれば、作文に対する印象がよくなる。

[事実だけじゃない]⁷⁾：事実だけでは作文とは言えず、自分の意見や、それを表す表現が重要だという。型を中心とした日本の作文授業がつまらないものだと感じていたことを例に、自らの気持ちを表現するものが作文であると答えている。

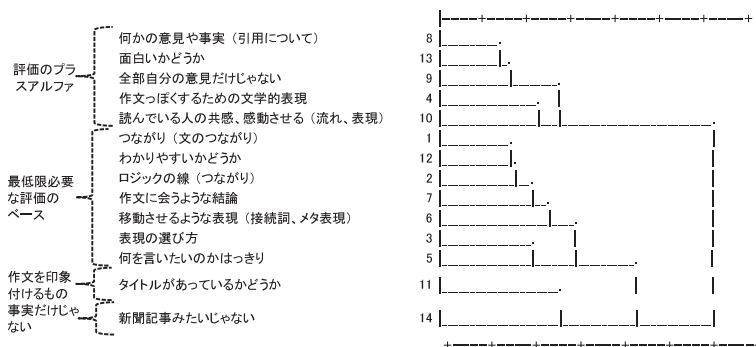


図1 留学生のデンドログラム及び解釈されたクラスター

4.1.3. 留学生Rの文章観

問題の背景や問題，結論が存在し，つながりやわかりやすさなどがあることは，作文が備えているべき基本的な形式である。作文では日常言語でなく，書き言葉に特有の表現が使われるべきであり，引用や洗練された文学的表現，おもしろさなどがあることにより，読み手を感動させることができるような流れを持つ，普通ではない「よい作文」となる。

4.2. 日本語教師JのPAC分析の結果

4.2.1. 作文の順位

- ①私の大切なもの（日A） ②愛と友情について（ロA）
- ③年齢の壁を越えて（日B） ④父と子の世代間に生じる問題（ロB）

4.2.2. デンドログラム及びクラスターの解釈

Rと同様，析出されたクラスターについてのJの解釈を報告する。

【一番大事なこと】：「おもしろさ」「わかりやすさ」「読みやすさ」を，よい作文を評価するために最も重要な基準であると述べていた。どんなにいいことが書いてあっても，難解な見た目や書き方では読む気にならず，わかりやすく読みやすいことが重要である。

【訴えたいこと】：「おもしろさ」にもつながるが，作文の中には何らかのメッセージ，つまり言いたいことが必要であり，それが明確に表れているかどうかが大切である。Jが最もよいとした「私の大切なもの（日A）」という日本人の作文は，言いたいことがわかり，共感できるため，すっきりと読めた。一方で「父と子（ロB）」の作文は，理解するために労力が必要であり，言いたいメッセージもよく理解できなかった。

【読み手を意識した作文】：ここで命名された読み手とは，評価をした自分自身のことである。作文が読み手に沿って書かれていれば，わかりやすく，共感しやすいような経験や身近なテ

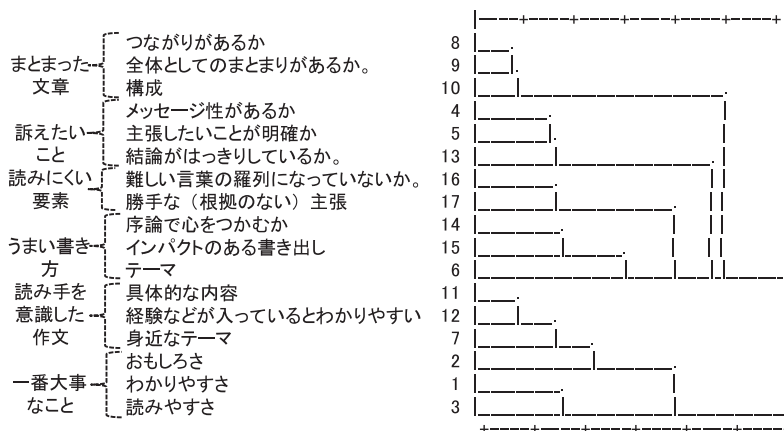


図2 日本語教師のデンドログラム及び解釈されたクラスター

マ(トピック)を用い、具体的に描写するはずである。このような作文であれば共感しやすく、よい作文の条件になる。

[うまい書き出し]：読みたい気持ちにさせるために必要である。「愛と友情について (ロA)」の作文は、書き出しにインパクトを持ち、読む気になった。タイトルや、インパクトのある書き出しは、読み手の心をつかむことができ、よい作文の条件となる。

[読みにくい要素]：ネガティブな基準として挙げられた。難解な言葉や表現の羅列や、意味のわからない情報の並べ方をさし、特に最下位に位置付けたロシア語の作文はこのような特徴を持っていた。

[まとまった文章]：文章構成や文章の流れに関する項目である。一貫したテーマとそれを述べていく流れが文章には必要であり、項目の羅列やトピックを行ったり来たりするような作文は相応しくない。

4.2.3. 日本語教師Jの文章観

よい作文とは、読みたいという気持ちにさせる作文であり、訴えたいメッセージを読み手へわかりやすく伝えることが必要である。読みやすさを失うような不明確な主張や具体性のない記述には、否定的である。抽象的な思想論でなく、自らを投影しながら読むことのできるような書き手の経験や、具体的でわかりやすい記述は、読み手の共感を得られ、読みやすく、わかりやすい「よい作文」の要件を満たしている。

4.3. 修辭的側面を重視する留学生Rと内容的側面を重視する日本語教師J

2人の対照的な語りは、メッセージ性は重要であるとしながらも、修辭的側面にも大きな注意を向けるRと、メッセージを評価の中核とするJという点に顕れていた。本節では、このような2人の異なりについて検討する。

次の例は、内容的側面を重視することについてJが語った内容である。

J：わかりにくいところもあったんですけど、これは、その、ちゃんと筆者の経験した、っていうことがあったので、わりとこの読みながら私も、自分の経験と照らし合わせながら、ああ、わかるわかる、という共感がすごくあったので、それがすごく、あ、う、はい。すごく、み、身近なテーマで、自分と照らし合わせながら読んでいったので、最後のこの人が主張したことが私にもすごくこう、心に響いてきたところがあったので、具体的な内容を入れると、読み手の心をつかみやすいのかな、ってのがすごく……

Jは、メッセージへの共感が大切であったことをまず語っている。また、読み手として自分を設定し、自らの経験と文章を照らし合わせ、追体験することができるといえるような具体的記述を基にしたメッセージを持つ作文がよい作文であると語っている。

一方、Rは質問者の、「共感とは、内容ではなくて、流れや構成のことなのか」という質問に対し、次のように語っていた。

R：うん。例えば、同じ内容だけど、流れを変えたら、例えば、どこにインパクトをつける

か、どこをもうちょっと強調するか、ことによって、その作文に関する感動が、感想が違ふと思う。(中略) 例えば日本の作文では、全然話し言葉ばかりだった。どういふことかという、全然単純な言葉で書いてた作文だったけど、もうちょっと難しい言葉とか、もうちょっと感動させるような表現、があると思う。

メッセージ性だけでなく、構成を整えることは重要であるという。また、文学的表現など、文章の美しさは感動を呼ぶ大きな要因であり、作文とは、話し言葉でなく、自らが感じたことが伝わるような表現で書くことが重要である。内容が重要であることは否定しないものの、それを伝えるための技術が、Rには強く意識されている。感動を生むためには、それなりの様式が必要であり、よい作文の基準となるのだという。

このような修辭的側面に関する感覚について、Jは次のように語っている。

J:一番好きじゃないって言った作文に関しては、なんか詩とかでてるし、なんか本当に、なんか、難しい言葉、書いてあって、なんかわりと、私の意見では、何々ですみたいな、まだ、ああ、そうだな、と共感してから意見が書いてあるわけではなく、まだついていてないのに、こういう問題です、みたいなことを言ってるどころとかがあって、なんか共感できないのに、ずっとそのう、上辺を読んでいった、みたいな。そういうのは、あんまり、たとえいいことが書いてあっても、受け取る側があまり、そういう体勢になれないっていうか。

文学的表現については、難解で読みにくいものとして捉えており、その使用の意図について理解できないという。むしろ、メッセージを伝えるための方略としてこのような表現が使われることについて否定的なのである。

このように、2名の研究参加者は、対照的な文章観を有していた。この異なりにより、作文自体の優劣判断に異なりが見られ、これを判断する際に重要視する要素も異なっていたのである。Rは、学校で習った作文の修辭的側面について、自らの文章を高尚に見せるような表現が目標であり、指標の一つであると語っていた。一方、Jは、わかりやすくおもしろいという内容的側面を重視し、共感しやすいような身近な具体例を求めている。このような結果からは、学習者の書こうとした作文と、教師の書かせようとしている作文には、隔たりが生まれてしまうことも示唆される。

5. 二人は自分自身の、そしてお互いの文章観をどう見たか。

以上、4つの文章を読んだ際に表出した2名の対照的な文章観についてみてきた。このような文章観はどこから来たのだろうか。これについて考えるため、PAC分析終了後、2名の参加者にそれぞれ、お互いの文章観についてまとめた結果を見てもらったうえで、自身、或いは相手の文章観についての解釈や、なぜそう思うようになったのかについてフォローアップインタビューを行った。本節では、このインタビューより、異なる文章観の存在を知った両者の反応と2人の文章観の背景について考察する。

5.1. 留学生R

Rは、お互いの文章観の違いについて、「違う作文を評価していると思う。」と述べた。自身の評価は、文学的的作文についての評価であり、Jの評価は現代的作文についてのものだというのである。このような自身の文章観について、Rは自身の文章観に「文学作品というルーツ」があったこと、そしてこれが「学校教育による評価」が高かった作文であったこと、さらに、現在、このような文章観が「留学を経て出会った文章から得た異ジャンルの認識と受容」につながっていることを語った。

文学作品というルーツ

Rは、作文とは、文学作品を完成させるような作業であると捉えていた。そもそも評価にあたり、よいと考えるために思い浮かべたジャンルがかなり異なっていたのである。

R：普通の言葉で書いているから、そんなに文学的には、レベルが低いと感じたと思う。(中略) ああ、ああ、やっぱり昔の人が19世紀の人の作文は、大体全部そうだったと思う。だから、その人、その作文は、高いレベルの作文と思っていた。なんでその、高いレベルに近づかせるために、同じように、きれいな言葉とか、難しい言葉とか使ったりしたほうがいいかな、って思っていた。

I：例えば？ どんなものを読んできた？

R：ドストエフスキーとか、トルストイとか。(中略) 内容はもちろんだけど、それは、読みやすい。自分にあまり考えられない表現とかがあったら、上手だなとか思って。

Rは、修辭的側面を重視する自らの文章観について、今回評価したような作文は、文学作品としての価値があるかないかを判断していたと語っている。これまでに読んできたドストエフスキーやトルストイといったロシア文学の作品を挙げ、これらの表現の美しさは、文章を高尚なものにしていると感じており、作文が示す書き手の教養を重視し、理想的な文章に近づくことが作文の目的の一つだと認識していたという。

学校教育による評価

また、このような感覚は、学校教育における活動や高い評価を受けた作文などを見聞きすることにより、形成されたという。学校では、同級生のよい作文を聞いた経験やそれについて感じたことについて、次のように語っている。

R：たまに、読んでもいいと思う人が、高い評価もらった人が、読んだりする。きちんとこうしなさいって言われたわけじゃないけど(中略) そんな書き方しなさいって言われないうけど、やっぱり文学の本をたくさん読む人はいい作文書く人だから。

I：やっぱりそこで評価されてた作文なんでしょうね、

R：うん。で、自分が、そのような表現使わない人だったら、子どもっぽいな、と思う。

ウズベキスタンでは、よい評価を受けた作文を生徒がクラスの中で朗読する活動が行われたという。そこで発表される作文は、文学的表現を上手に使った美しい作文であり、内容をうまく例えられている文章を美しいとする文章観が育まれたと振り返る。このような共有体験から、高い評価を受けた作文はRにとってのある種のロールモデルとなったと考えられる。Rにとっては、美

しい表現を使わない、いわゆる日常言語で書かれた作文は教養のない「レベルが低く、子どもっぽい」作文であり、文学作品を目標とした学校教育での作文活動がRの文章観形成に関わっていたことが示唆される。

留学を経て出会った文章から得た異ジャンルの認識と受容

しかし、現在のRは、このような一般的な作文だけでなく、他のタイプの作文についても評価ができるようになったという。これには、「よい作品」に出会い、これに感動したことが関連している。Rは次のように語っている。

R: でも、これは、現在の、文学に出る感じの作文についてだと思う。だから、今も、ううん、何とか賞をもらったもの、*Life of pie?* トラと私みたいなの、英語で読んでるけど、賞もらってる作品だけど、普通の言葉で書いてあって、いいなって感じがする。(中略) 簡単なほうがいいと言うことじゃなくて、簡単でもいいって言うふうになり始めた。

Rは、最近、賞をとった英語の小説を読んだという。この小説では、複雑な表現はあまりなく、Rにとって日常的な言語と感じられる文体で書かれていた。しかし、内容は興味深く、いいと感じた。これにより、Rはこれまでの認識を変化させ、日常的な文体で書かれた別のよい文章があることに気づいたのだという。また、このような気づきは、日本語の授業、日本語や英語の文章に触れることで徐々に起こっていったと振り返る。ただし、これまでの文学的な表現についてよいと思わなくなったわけではなく、別のジャンルの作文として評価ができるようになった。これまでの文学作品を目標とする作文という評価の枷が外れ、よい作文の枠の広がりが生じたというのである。

5.2. 日本語教師J

Jは、自己の文章観について、確かにそうであると首肯し、今回の作文の評価は、実際の指導の際にも反映していると語った。また、Rとの大きな違いに驚き、これを理解しようとしながらも自らの文章観に拘りを示した。Jは、Rと同様に「過去の体験によって形成された文章観」であったとし、Rの文章観について、「異なるジャンルの異なるよい文章観」なのではないかと捉えていた。また、自身の文章観は「日本語教師としての指導に反映する文章観」であると振り返っている。

過去の体験によって形成された文章観

Jは、自身の文章観を振り返り、過去の経験が影響したのではないかと。過去に自身がどんな作文を書いていたかについて、次のように語っている。

J: 中学校や高校でですか。私わりと作文を書くのは不得意ではないんですよ。読書感想文とかでわりと佳作に入ったりとか、あと国語の時間作文書きましようって言ったらわりと早く書いてしまったりとか、あと妹の読書感想文をちょっと手伝ってあげたら、県で入賞しちゃったことがあったり、わりとなので、起承転結、はっきり拘ってますね。

Jは、自らの学生時代、読書感想文など作文を書くことが苦手ではなかったと振り返り、その当時に有していた方略や方法、信念を明確に持っていることを語っていた。

また、Jは子どものときに、青年の主張のような大会、主張大会へ参加したという。

J：小学校のときに主張大会っていうの出たことがあって、そこですごく難しい言葉で、その小学生にしては難しい言葉で難しくなって言う言葉とか、すごくかっこいい言葉で主張した人もいたんですけど、でも結局、作文の発表と言うのとは違うかもしれないんですけど、結局心に響いたというか、訴えたいというメッセージを持って、聞くことができた文章とか、そういう発表は、難しい言葉じゃなくて、簡単なわかりやすい言葉でもいいので、本当に伝えたいことの熱意っていうか、伝えたいことが明確だったというかそういうことだったっていう経験があるんですね。

Jは、自身が参加した主張大会において、よい発表と悪い発表の違いが「自分の言葉で訴えられたメッセージの有無」であると感じた経験について語った。このような経験は、受け取るメッセージの有無がよい文章であるという現在の認識につながったという。

また、メッセージ性については、いろいろ考えた末、やはり最も重要なものであると再認識したようである。これについて次のように語っている。

J：やっぱり私、今感じたんですけど、文字を読むとき、メッセージを探しちゃうかもしれないです、でも、なんか、なんか、すごいきらきらなんたらかんたらって、すごいそのポエムって、絵とか情景を思い浮かべる美しいの、を楽しむみたいな感じて私は勝手に思ってるんですけど、そこになんかメッセージ性ってあんまりないのかなって感じると、文章を読んでく中でメッセージって何って感じるのに、むなしさを感じるっていうか、なのに、その文の中に詩とかがあると、どういう意味どういう意味？ってすごく思っちゃって、ストレス感じるかもしれない。

Jは、よい文章観は何かと考え、これまでの自身の経験を振り返り、メッセージ性を持ち、読みやすい作文がよいという考えを再確認していた。このように、主張大会や読書感想文といった活動が、Jの文章観形成に大きく関わっていたことが示唆された。

異ジャンルの評価としての文章観

Jは、Rの文章観について、「私とは違うんだなっていうのが最初に、いい作文と考える視点が違うんだなっていうのはすごくおもしろくて」というように、自分とは異なる見方が存在することを知ったと語った。しかし、このような別の文章観を、自分のものとして受容しているわけではない。存在を認めながらも、自分自身の評価に取り入れるには疑問があり、異なるジャンルを評価しているのではないかと振り返っていた。

J：小説はポエムよりもメッセージ性が必要だと思います。で、ポエムは、私は美しさだけで、そんなメッセージってのはないかな、って考えてます。だとするとそこは、そのRの考える美しさっていうのが文学的表現というのが一番重視されるかなって思います。(中略) 私も、なんか、主張大会を想定して考えたこの文章観よりは、そこも、重要視しなきゃいけないかな、っていうのは多少変わってくると思うんです。

Rの文章観について、同じ文章を読んだにも関わらず異なっているのは、自身は、主張大会のような作文を想定し、評価していたこと、そしてRは、文学作品を想定し、評価していたのではな

いかと捉えていた。また、そのような作文であれば、重視するものは変わってくるとしたうえで、必ずしもRに100%同意できるわけではないとも語っている。

これについて、今回読んでもらった作文は、自分の理想とする作文に似ているのかと尋ねたところ、Jは「私の理想だと感じるのに、似ています。」と、自分の経験と照らし合わせ、具体的に共感を得られるメッセージを持つ文章はJの期待に沿った文章だとしている。修辭的側面が内容的側面に優先しないことに、Jは強い拘りを示したのである。

指導に反映する文章観

Jは、自らの文章観を振り返り、「今これをまとめてもらった文を読むと、ああ、私はこういうの、大事にしながら教えているんだな、と感じたというか」というように、子どものころから持っていた文章観が実際に日本語教師になってからの指導でも反映されていたことについて、次のように語っている。

J: 何のために日本語書かせるんだらうって考えて作文指導って計画すると思うんですけど、そういうときにそのう、作文のメッセージ、コミュニケーションっていうの考えたときに、やっぱりきれいな日本語とかかっこいい語彙とか難しい語彙とかではなく、なんか、文章全体としても訴えたいことが明確、メッセージ性が強いっていうこと、(中略) それともう一つは、自分が日本語教師になって、作文指導と言うより、履歴書を、の、本人希望欄とか、志望動機とかを指導するときに、やっぱ文章がへたくそでも、そこで働きたいとか、こういう仕事がしたいとかできますっていうアピールがすごい感じられる文章と、なんか人の言葉を借りてきたような、きれいな言葉でまとめてあるどこかからうつしてきたんじゃないか、っていう心を動かされない作文を書いてきた人とは、たとえば作文が下手でも、何かを多分ここに反映しているんじゃないかな、って感じます。

Jは、自分の言葉で心を動かすような文章を指導したいという。樺島(1998)には日本の小中学校では「感動を書かせる」ことが作文教育であると信じている教師が少なくないことが指摘されている。本研究のJは、このような指導と符合するような文章観を有し、自らの文章観を基にして学習者の書いた文章を評価、判断しているというのである。

5.3. まとめ

両者はともに、よい文章だと感じた過去の経験を通じ、それぞれに文章観を形成していた。また、お互いの異なる文章観を知り、同じ文章を読んでも異なるジャンルとしての認識があったのではないかと考えていた。Rは、異文化接触によって異なるジャンルの文体を受容し、新たな価値基準を取り込んでいた。それに対し、Jは異なる文章観の存在を知ったものの、これを自らに内在化しているわけではなかった。単に知るだけでなく、「納得する」という体験を得ることによって、文章観は形成されるのだと考えられる。異文化間コミュニケーションにおいて、文化的アイデンティティを「あるもの」ではなく、「なるもの」として捉えるという考え方がある。個々のアイデンティティは、それぞれの単なる背景、つまりルーツではなく、変遷を経てここに至る道程、ルーツをまなざすことによってよりよい理解が可能になるのである(渋谷2013)。文章観も、

アイデンティティの形成と同様に、単にこれまでに所属した共同体の価値観を受容しているのではなく、これまでに所属した様々な共同体の価値観を知り、それを納得して受け入れることにより、文章観の変容や新たな文章観の獲得に結び付いていると考えられる。

6. 結語

本研究では、異なる背景を有する2名を事例に、2名の対照的な文章観と、これが形成されるに至った過去の経験や、これに対する現在の考えについて検討してきた。Rは、美しい言葉など日本ではあまり見受けられない項目の重要性を語り、Jがよいとするのは、日本の小中学校で経験し、彼女自身がよいと納得した作文であった。何をよいとするかは、過去の経験や教育が形成してきた価値観にも強い影響を受けている。一人一人の文章観は異なり、それは、過去に参加した共同体における経験が何らかの影響を及ぼしていると考えられるのである。

両者に見られたような、異なる文章観を形成する基準の違いは、教師と学習者の間に誤解を生む危険性を有している。しかし、両者は、自身と異なる文章観に気づくことにより、異ジャンルの評価としての文章観を受け入れたり、自身の評価とのずれがなぜあるかを考えたりしていた。そのため、これに気づいたうえで、文章観が異なる読み手へ訴えるような対話が重要になると考えられる。本研究では、個々が持つ文章観を言語化し、お互いへフィードバックすることで、異なる文章の見方への気づきを生む対話が見られた。日本語教育の実践では、作文カンファレンス⁸⁾や、チュータリングセッションなどで、このような気づきを生む対話が行われるべきである。こうした場では、教師の正しいと思う文章を「教える」のではなく、教師やチューターが学習者の「信頼できる他者」となり、異なる文章観の存在について配慮することが重要である。これにより、個々の歩んできたルートを考慮した、対等で有益な対話を行うことが可能になるのではないだろうか。

注

- 1) Ерохина Е. Л. (2002)にある作文例を使用した。中等教育向けに、お手本とされるような作文例が示された作文教科書である。
- 2) 倫理的配慮として、使用された作文が特定されないように、本文中ではタイトル名を変更した。
- 3) ウズベキスタンは、1991年にソビエト連邦からの独立を果たしたため、ロシア語を母語とする者が現在も多くいる。ウズベキスタンでは、民族それぞれの言葉による教育や行政サービスの機会が保障されているため、国語であるウズベク語による教育に加え、ロシア語による教育も広く行われている。
- 4) 連想語の類似度評定には、10段階の評価をPC上でスライドさせて行うPAC分析支援ツール(土田義郎氏作成)を利用した(繰り返しなし)。
- 5) クラスタ分析とは、複数個の特性により定められた個体間(もしくは変数間)の類似性の尺度を基に、各個体または、変数をいくつかのグループに分類する手法である(高木2006)。本研究では、統計ソフトHALBAU7を利用し、Ward法による分析を行った。

- 6) デンドログラムは、クラスター分析により、変数が併合されていく過程が示された図である。クラスター間の距離を縦軸にとり、項目間の類似性が描かれている。
- 7) クラスターにはなっていないが、R自身が分かれないと解釈したため、別のクラスターとした。
- 8) 作文カンファレンスとは、単に書かれた作文を訂正するのではなく、作文の意図や解釈を話し合いながら作文の修正を促すフィードバックの手法である。教師、学習者の双方に利益をもたらす対話を生むフィードバックとして、第2言語教育にも取り入れられている (Hyland & Hyland 2006)。

参考文献

- Ерохина Е. Л. (2002) 1000 лучших школьных сочинений, литература XX века., Издательство АСТ, Москва.
- Hyland, K, Hyland, F. (2006) *Feedback in Second Language Writing: Context and issues*. Cambridge University Press,
- 権島忠夫 (1999) 『文章表現法 五つの法則による十の方策』角川選書
- Li, Xiao-Ming (1994) “good writing” in cross-cultural context, State University of New York press.
- 内藤哲雄 (2002) 『PAC分析実施法入門-個を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版
- 渋谷真樹 (2013) 「ルーツからルートへ—ニューカマーの子どもたちの今—」異文化間教育, 37, 1-13
- 高木廣文 (2006) 『HALBAU7によるデータ解析』シミック株式会社
- 田中真理・坪根百合・初鹿野阿れ (1998) 「第二言語としての日本語における作文評価—「いい」作文の決定要因」
日本語教育, 99, 60-71
- 田中真理・長坂朱美 (2009) 「ライティング評価の一致はなぜ難しいか—人間の介在するアセスメント」社会言語科学, 12(1), 108-119
- Thondhlana, J. (2000) *Contrastive Rhetoric in Shona and English Argumentative Essays*. University of Zimbabwe Publications.
- 渡邊雅子 (2004) 『納得の構造—日米初等教育に見る思考表現のスタイル』東洋館出版社